

## 資 料

パ                      リ  
—— 誕生から現代まで ——  
[XXXI]P. クールティヨン      著  
金   柿   宏   典\*   訳注

ラ・ベル・エポック（2）

## 洪水と大火

妻の実家グールド家<sup>1)</sup>の金で、カイゼル髭をはやし、青い瞳をしたボニ・カステラース侯爵<sup>2)</sup>はローズ宮で豪華な宴会を開いた。その会には、着飾った優雅な御夫人連が出席したが、透け透けのギャザのついた服のため、ほとんど裸同然の女性たちもいたのである。呑気で軽薄なパリは、ほとんど犯罪的といってよい軽率さで、火山の上で踊っていた。フランスは赤い長ズボンを着用した歩兵部隊を持っていたが、大砲も備蓄した食糧も無かった。その間アメリカ合衆国はドルと資本主義の支配を樹立し、大英帝国は支配地の周辺を要塞化し、ドイツ皇帝ウィルヘルム 2 世<sup>3)</sup>は軍国主義を鼓吹し、恐るべき艦隊を創造していたのである。

1910 年 1 月、パリは大水害に見舞われる。これが最初ではなかったが、セーヌ川の最も恐ろしい氾濫の一つだった。川の流れは増水し、敷石を押し流して人々を大いに動揺させた。激流が町の中に奔入してくる。交通手段はお手上げだった！ 電車、地下鉄、鉄道のすべてがストップした。洪水が勝利し、ベルシー<sup>4)</sup>やラ・ラペ河岸<sup>5)</sup>を再び手中にし、

---

\* 福岡大学名誉教授

ル・アーヴル広場<sup>6)</sup>やサン・ラザール駅<sup>7)</sup>まで増水してきたが、その下には嘗てセーヌ川の支流が流れていたのである。

ボートが漂う木材の間を縫って住民を運んだのは、それらの木材を除去するのが困難だったからである。ルイ・フィリップ橋やジュリ橋のアーチが増水のため見えなくなる。アルマ橋<sup>8)</sup>のズワーヴ兵<sup>9)</sup>の彫像も完全に水没した。土手を急造する。篠つく雨に打たれながら、人々は舟に乗り降りする。裁判所の中庭は湖になった。やっと1月30日になって晴天になる。セーヌ川の水は退き、人々は用心しながらおそろおそろ通りにでてくる。

この同じ年、シャルル・ペギー<sup>10)</sup>(彼は1900年に『半月手帖』<sup>11)</sup> *les Cahiers de la Quinzaine*<sup>11)</sup>を創刊し、当時ソルボンヌ街に住んでいた)は、『我らの青春』*Notre Jeunesse*の中で、キリスト信仰の社会主義者であり金銭の敵である自分の態度を説明している。彼は間もなく連祷的詩句で書いた『聖ジュヌヴィエヴのつづれ織り』*la Tapisserie de Sainte Geneviève*を出版するだろう。

ペギーは、あらゆるものが共和政より価値があるとする『アクション・フランセーズ』<sup>12)</sup> *l'Action française*の王党主義者シャルル・モーラス<sup>13)</sup>を非難する。心底から社会主義者だったペギーは、再び猛威をふるいはじめたアナーキズムを拒絶する。

「法無く、軍無く、教会無し

全てが無く、無も無いのが必要！」

敵対する団体により、新しくしかも組織化された無政府主義者たちは、自分たちの考え、テロを拡大する事を白昼堂々パリ全体に実行しようとする。ボノ<sup>14)</sup>やヴァレに属する団体は互いに恐れる事なく、何度も強盗や殺人を繰り返して市民をテロに巻き込んだのである。

### マルセル・ブルーストのバリ

今世紀初頭のバリが連続する画面となって出現し、マルセル・ブルーストの作品の中で断片が結合しあって造成されている。それは丁度見事な構成を持った巨匠の絵のようで、そこでは視線が風景から人物へ、大きなカーテンの部屋の内部からガブリエル大通り<sup>15)</sup>の砂を敷いたマロニエの並木道へと移動していくようである。

ブルーストは大いなる魅力を持つバリを描いた画家である。一つの社交界全体、典型的なパリ社交界が、彼の小説の舞台である。彼により、すべてが少々ぼやけているが、しか

しながら忘れ得ない夢と現実が同時に存在する雰囲気の中に置かれている。パリ・コミュニティの一箇月後、ラ・フォンテーヌ街<sup>16)</sup>のヴェール伯父の家で生れたこのパリ市民によって喚起されたパリは、もし他の人物により詳細に描写されたとしても、はるかに現実的である。我々はそこで暗示的な名を持つ街々を歩き廻り、叫び声を聞き、個々の人物たちを知る事になる。我々は、オデット・スワン<sup>17)</sup>の香のような女性の香をそこで嗅ぐのだが、彼女は「カーテンで密閉されたその時の部屋の熱気の中で、彼女の脇にその場にありえたバラと同じような冷気を彼女に与えている軽やかな服」を着ていたのである。

アムラン街<sup>18)</sup>のコルク張りをした部屋に病気の夢を閉じこめる前に、ブルーストは、彼がラ・ベルマ（サラ・ベルナルとバルテ夫人<sup>19)</sup>の合成）と呼んでいた女性を聞くため、コメディ・フランセーズに行っていた。彼はコロヌヌ<sup>20)</sup>やラムルー<sup>21)</sup>のコンサートによく行った。彼はジャルダン・ド・パリ<sup>22)</sup>やラベルズ<sup>23)</sup>で夕食をとっている。リッツ<sup>24)</sup>では、「チョコレートをかけたアイスクリームのヴァンドームの円柱」を味わったのである。

この首都の全体の印象が、散文中で描写したこの偉大な詩人によって我々に与えられていなかったら、1900年から1920年の間にありえたままのパリを考える事はもはや不可能になっていたにちがいない。彼の文章は絶えず再開されて、光が点滅しその度ごとに都市の全体を描えているエッフェル塔の燈台の光を思わせるのである。

### 芸術家と詩人

ボナール、グイヤー<sup>25)</sup>、未来の美術の預言者と自称していたナビ派<sup>26)</sup>は、パリやバティニョルやリュクサンブール庭園から、持続性のある絵画を提供していた。特にボナールは、モンマルトルで、クリシー広場のカフェのテラスやお好み的大通りや花売り娘たちを描いている。

1905年のサロン・ドートンヌは、フォーヴィスム<sup>27)</sup>の中ではドラン<sup>28)</sup>とヴラマンク<sup>29)</sup>と共にマティス<sup>30)</sup>とマルケ<sup>31)</sup>を提示することになる。最初の二人はテノールのような色彩を使用したか、それはほとんどチューブから搾りだしたままの色で、ノートル・ダムの塔やサン・ミッシェル河岸<sup>32)</sup>やブローニュの森の池の岸辺を描いている。後の二人は、橋、河岸、パリの街路からサマリテーヌ<sup>33)</sup>の光で照らしだされたボン・ヌフの夜景までを描いている。

次のキュービスト達<sup>34)</sup>、その詩情は「洗濯船」<sup>35)</sup>と名づけられていたラヴィニャン街<sup>36)</sup>の木造のバラックから最初はひそかに誕生してきたのだが、彼ら独得の精確に構築するスタイルで、サクレ・クール、アトリエの内部、アミ・エミールの店の正面にある自分達の住居の入口の前の広場などを描いたのである。彼ら全員はモンマルトルの住人で、夕べにはラパン・アジル<sup>37)</sup>に集まるのだが、その店ではフレデがギターを弾きながら「車引きの女」*la Femme du roulier*を歌っていた。ユトリロ<sup>38)</sup>は窓が閉められた家々の並ぶこの丘の街路の姿を描き、石膏で修繕され、老いた野生の鹿の群のような白壁を微妙な陰影をつけた色彩で示している。

あらゆる方面から、画家たちはパリにやって来た。カタロニヤからピカソが、マドリッドからホアン・グリ<sup>39)</sup>が、キリコ<sup>40)</sup>とジノ・セヴェリーニ<sup>41)</sup>と同じくモジリアニ<sup>42)</sup>はイタリアから、シャガール<sup>43)</sup>、スーティン<sup>44)</sup>、ブーニ<sup>45)</sup>とカンディンスキー<sup>46)</sup>はロシアから上京してきて、これらの画家たちはフランス人のルオー<sup>47)</sup>、ブラック<sup>48)</sup>、デュフィ<sup>49)</sup>、レジェ<sup>50)</sup>らと共にパリ派 *l'Ecole de Paris*<sup>51)</sup>を結成する。更にパリに来了彫刻家たちを記す必要があろう。スペインからはゴンザレス<sup>52)</sup>とガルガロ<sup>53)</sup>、ロシアからはペフスナー<sup>54)</sup>とザッキン<sup>55)</sup>、リトアニアからリブシツ<sup>56)</sup>、彼らはフランス人のブールデル、マイヨール、デスピオー<sup>57)</sup>やデュシャン・ヴィヨン<sup>58)</sup>の仲間に参加する。

パリはサン・マルセル地区<sup>59)</sup>生れのロダンの彫刻によってまだ支配されていた。偉大な彫刻家は、自分の芸術を認めさせるために戦わねばならなかった。彼は政府から依頼されやがて注文を取消される「地獄の門」*la Porte d'Enfer*の計画を内心に持っていたが、その頃彼のバルザック像（ヴァヴァン街<sup>60)</sup>とモンパルナス大通りの四つ辻に現在は安置されている）が、それを彼に注文した文芸家協会から拒否されたのである。しかし新しい像の作者はルーマニアから来たブランクーシ<sup>61)</sup>で、彼はヴォージラル街の袋小路の奥に住んで、そこで現代の彼の主要作品を創作していた。

芸術家たちはその頃からモンマルトルを捨ててモンパルナスに移って行った。ラ・ロトンド<sup>62)</sup>やドーム<sup>63)</sup>などのカフェが全世界から来る人の集会場になる。建築家、画家、彫刻家、革命派の政治家たちがミルク・コーヒーの周囲で出会ったのである。

では詩人たちは？ クローデル<sup>64)</sup>の『都市』*la Ville*の中にパリを示す暗示はなかったろうか？ それはほとんどないといっていい。しかし我々にポーランドが与えてくれた偉大なるパリ市民ギョーム・アポリネールはセヌ両岸の散策者となり、この地区の愛好者になる。その間サンドラール<sup>65)</sup>は、スイスから来て、流れを照らすイルミネーションに

魅了されていた。

「セーヌ川の睡蓮、それは水の流れに浮かぶ月だ  
空の銀河はパリの上で恍惚となり、パリを抱き  
狂おしく裸となり悶絶する。」

コクトー<sup>66)</sup>は『エッフェル塔上の花嫁花婿』*Les Mariés de la tour Eiffel*を出版する。画家や恋に悩む娘たちの友アンドレ・サルモン<sup>67)</sup>は『サクレ・クールの人女』*la Nègresse du Sacré-Coeur*を書き、その間マックス・ジャコブは首都の門番の率直で単純な文体を再発見する。

### 社会的権利の要求

その実態がよりよく知られるようになった労働者たちの運命が、ますます人々の心を占めるようになる。組合運動は強化される。1902年、労働組合センター Bourses と労働組合連盟 Fédérations が統一され、労働総同盟<sup>68)</sup> Confédération Générale du Travail が結成される。それ以来、ストライキはプロレタリアートにとり、窮乏や弾圧や不十分な給与の時に権利を要求する手段となる。(ルネ・セディヨ<sup>69)</sup>の説によれば、労働者の年給は、麦で換算すると、サン・ルイ時代の日雇労働者の2倍にもならなかった、という)。1907年、サラリーマンに週休が認可される。労働災害の時の雇用者の責任が明確にされる。労働者の年金制度が樹立される。次にその一年後、社会保障制度が発足する。

惨憺たるストライキが起った。労働者たちは、鉦夫に認められた一日8時間労働を要求し、これはやがてすべての労働者に認められるようになる。1906年5月1日<sup>70)</sup>は革命の日ようだった。クレマンソーはパリに軍隊を召集し、労働組合センターを閉鎖し、C.G.T.の書記たちを逮捕させた。内相として彼は立ち向う。ストライキの権利は「棍棒を持つ権利ではない」と、彼は宣言する。しかしながら、19世紀末から既に、ヴァンデ出身の政治家は労働問題が持ちはじめた国際性を洞察して、5月1日がやがて人々の要求に応じるデモ行進を増大させていく事を予見したのである。組合運動について、代議士たちに彼は次のように語った。「これこそ興隆して国家権力を手中にしよう第4番目の国である。これは避けられぬものとして受け入れねばならない。この第4番目の国家は暴力によってかあるいは両手をひろげて歓迎するか、どちらかのやり方で、諸君に自分を認めさせる筈だった... 諸君にお願いする、偏見を捨ててほしい... 人間になってほしい。」

場末の生活の悲惨さは、金持ち階級に対する反乱を再び活潑にする。社会的幸福のバランスは深刻に損なわれていた。マルキシズムが労働者の家庭に滲透してくる。人々は収益のあがるすべての活動を国家が支配する事を期待した。

1910年、鉄道のゼネ・スト<sup>71)</sup>が起った。その時ブリアンは鉄道員を動員した。すべてが終った頃、彼は両手を上げて言った。「みてくれたまえ、血は一滴も流されてないぞ。」1914年まで、ストライキは増加していく。「偉大なる夕べ」Grand Soir（アナーキストや共産主義者にとり現行体制を覆す革命の日を指す）を語る人々に対し、ジョーレスは社会主義の中に共和主義者に対する理想を示した。彼は、フランス銀行、鉄道、鉱山の国営化を要求する。しかし彼は反軍国主義と反愛国主義を推進する。寛容な精神と心情をもつ彼は、該博な教養でその雄弁を涵養している。彼は雄弁家であり、社会主義の大立者だった。「芸術家諸君、と彼は言う、我々を恐れなくてくれたまえ、諸君の傑作を前にして、分断された人間性の断片でもなく、また飽食で麻痺したエリートでもない、諸君と同じ友愛と自由な人間性とそれらの傑作を最初に名づけるのが、我々だからである… 人間的芸術を最初に創造する者こそ我々なのである。何故なら、現在まで人間的芸術の切れ端しか、人間性の切れ端しか此処には存在しなかったからである。」

ヴィランという名の狂人が、モンマルトル街<sup>72)</sup>の角にあったクロワッサン街<sup>73)</sup>の小さいカフェで、第1次大戦前夜暗殺したのは、このような人物だったのである。彼はそこで、食事をするためテーブルに穏やかに坐った社会主義のリーダーと会っていたのである。

(続 く)

## パ      リ

## —— 誕生から現代まで ——

(訳 注 XXXI)

1) Gould: アメリカの鉄道王ジェームズ・グールド (1836-1892) は、鉄道網建設に投機して莫大な富を手中にした。金の買占めをして「黒い金曜日」(1869.9.24.)の恐慌を惹起した。後にユニオン・パシフィック鉄道会社の株を買占め、西部の4つの鉄道会社を支配した。「ニューヨーク・ワールド」紙を所有、ウェスタン・ユニオン電信会社を創立 (1881)、ニューヨーク高架鉄道にも投資している。アメリカの富豪たちは、名門貴族に憧れていたから、グールドの娘もフランス貴族と結婚したのであろう。

2) Boniface, 通称 Boni de Castellane (1867-1932): 彼の曾祖父カステラーヌ侯爵ヴィクトール (1788-1862) はフランス陸軍元帥で上院議員だった。ボニは、1895年に前記の鉄道王の娘アンナ・グールドと結婚、ベル・エポックのパリの有名人となり、代議士にもなったが (1898-1910)、妻に離婚されてから (1906)、忽ち窮乏生活に陥ち込んでしまった。

3) Friedrich Wilhelm Viktor Albert (1859-1941): ドイツ皇帝、プロイセン王 (1888-1918)。父フリードリヒ3世 (在位 1888) の短い治世の後をうけ、ドイツ帝国の強大化に努力したが、独裁的性質で自説を曲げず、ロシア問題で老練な宰相ビスマルクを罷免 (1890)、アフリカの植民地獲得や海上権確立のための海軍拡充方針は、フランス、イギリス、ロシアなどの猜疑心と不安を助長した。最初イギリスはドイツとの友好関係樹立を目的に、独英同盟の成立を計ったが (1898-1902)、結局失敗し、ドイツの侵略に備えてフランスとロシアと連合し、ドイツ包囲網を完成した。ストライキの頻発による社会不安は軍備の拡大に狂奔する国王への不信を、一般国民が表現したものといえる。議会とも対立したウイヘルム2世は軍部に対する実効ある支配権を次第に喪失し、実権は参謀総長ヒンデンブルグ元帥 (1847-1934) や参謀副長ルーデンドルフ将軍 (1865-1937) が握るに至った。彼らはドイツの孤立を軍事力で打開せんとして第1次世界大戦の火蓋を切ったのである。緒戦は優勢だった戦況も、アメリカの参戦によりドイツの敗色は濃厚となり、国内での反戦デモからベルリン革命に発展 (1918.10.)、この間国王はなんらなす術なくオランダに亡命 (1918.11.14.)、11月28日に退位を宣言した。オランダは連合軍の引渡し要求を拒否し、ウイヘルム2世の定住を認めたため、彼はオランダ中部ユトレヒト

近郊のトオルンの居城で歿した（1941.6.4.）。

4) quai de Bercy : 第 12 区にあり、エスコフィエ街とベルシー大通りの間にのびる長さ 1,785 米、幅 19 米から 25.5 米の河岸。この河岸は 1672 年には既に形成されていたのは、1570 年頃からセヌ川上流のモルヴァン地方の木材を筏を組んで運送して来た終点だったからである。木材は建築や燃料に用いられた。この貯木場は長大で、ラ・ラペ河岸まで広がっていた。河岸の他にベルシー港もあり、長さは 1,645 米で、ベルシー橋までのびていた。

5) quai de la Rappé : 第 12 区にあり、ベルシー橋からバスチーユ大通りまでの長さ 1,040 米、最小幅 20.5 米の河岸。この河岸は、18 世紀には、川沿いの道 chemin le long de la rivière と呼ばれ、パリから来るとアルスナルの濠に架っている小橋を渡るため 3 ドニエの渡し賃を払わなければならなかった。1806 年に直線化され舗装された。名前の由来は、16 世紀に現在のベルシー河岸にあったラ・ラペ館 Hôtel de la Rappée からきている。

6) place du Havre : 第 8 区と第 9 区にひろがり、ル・アーヴル街とサン・ラザール街の合流点にある。この広場の名となったル・アーヴル街は、当時「西駅」embarcadère de l'Ouest と呼ばれていた駅に行く便を計るためカプシヌ修道院の土地を通り、サン・ラザール街まで延長された。計画は 1843 年に立案されたが、完成したのは 2 年後の 1845 年であった。この広場の 1 番地に、デパートのル・プランタンの 1 号館が、1865 年 5 月 11 日に創立されている。1881 年 3 月 9 日早朝の火災により焼失したが、すぐに再建増築され、1889 年に完成した時は、売場面積は 3,000 平方米になっていた。

7) gare de Saint-Lazare : サン・ラザール街 18 番地にある。アムステルダム街とサン・ラザール街の交叉点の現在地に移転したのは、1843 年の事で、経営者のペルイールがビゼー袋小路にあった邸の跡地に新駅を建設したのである。従って、パリからサン・ジェルマン・アン・レー線のバック駅（最初は此処が終点だった）まで走った一番列車が発車した駅は、マドレーヌ寺院裏のトロンシェ街で、ロンドン街とヨーロッパ広場の角地に、1836 年、アルマンとフラシャによって建設された旧駅からである。

現在地に移転した当時の新駅は、4 階建てで左右に翼棟を持っていたが、それ程広くなかったで、すぐに手狭になったが、それでもカフェと本屋を持っていた。1859 年、西側にローム街が開通したため、1867 年にこの通りを主翼棟につなぐ長いギャラリーが新設され、郊外線と循環線の業務がここに集約された。



この駅舎は、1885年から89年にかけ、リスクのプランにより大改造され、アムステル街とローム街の間のサン・ラザール街に平行して建つ長い正面玄関が新設され、両端に広い広場を配した現在の姿が出現した。この広場の間に終着駅ホテル「ホテル・テルミニウス」L'Hôtel Terminus が建設される。1894年2月12日、このホテルのカフェで爆弾事件が発生、約20名の重軽者をだす惨事となった。犯人はエコール・ポリテクニクの学生で19歳の青年エミール・アンリで、無政府主義者であった。彼は同年5月21日にギロチンで処刑されるが、検死報告によると、恐怖のため、ギロチンの刃が落ちる前に死亡していたそうである。

駅舎は、1930年に再度近代化の工事が施工され、駅前広場も、1936年に近代化されている。

サン・ラザールの名称の由来は、駅前からラマルチース街、ブルー街、バラディ街を経て行き着くフォートル・サン・ドニ街にあった癩病患者を収容していたサン・ラザール、又の名をサン・ラドル病院 maison de Saint-Ladre から、といわれる。この病院の起源は定かではないが、十字軍遠征に出発するルイ7世が1147年に訪づれ、裁判権や市場開催の権利を施しとして贈与した事が、史実として記録されているそうである。1632年1月7日、サン・ヴァンサン・ド・ポールが経営を一任され、彼はパリ市内と郊外の癩病患者たちを此処に収容している。後にこの病院は、司祭の教育や道楽息子の矯正施設などとしても利用され、神学校、僧院、刑務所、老神父たちの隠遁所など多くの顔を持つようになった。サン・ヴァン・ド・ポールは、84歳の1660年9月27日、此処で歿し、この施設の教会の内部に埋葬されている。

8) pont de l'Alma : 第7区、第8区、第16区を結び、ニューヨーク大通りとブランリ河岸の間にかかる長さ153米、幅20米の橋。ガブリエルにより1854年から56年にかけて建造され、1856年4月2日、ナポレオン3世臨御の下に開通式が挙行された。もともとは、1855年の万博の交通の便のために立案されたのだが、残念ながら間にあわなかった。アルマはクリミア半島の川でセバストポールの北で黒海に注いでいる。1854年9月20日、サン・タルノー元帥とラグラン卿の指揮する仏英連合軍がこの川を渡河し、メンチコフ將軍のロシア軍を撃破した。この勝利を記念して新橋にこの名が命名されたのである。この橋脚にディエボルトとアルノー競作の、アルマの戦いで勇戦した4人のズアーヴ兵士像が据えられ、特にディエボルト作のアルジェ歩兵像が服装の正確さで人気を呼んだ。またこの像がセヌ川の水位を測定する目安になっている。この橋は、1920年に改修工

事が行われた。

9) Le Zouave : アフリカのカビリア地方の部族で、1830年にブルモン将軍がこの部族民から選抜して歩兵部隊を編成した。赤いダブダブの長ズボンと青い上着とチョッキという独特の軍装をしていた。1837年から41年にかけて編成されたズワヴ連隊はフランス人のみの兵士からなり、クリミア戦争、イタリア戦役で勇戦した。制服を最初のズワヴ兵のものを着用したため、この名がある。この連隊は、その後2度の世界大戦、インドシナ、アルジェリアの戦いにも参加している。

10) Charles Pierre Péguy (1873–1914) : 父は指物師、母は椅子の修繕婦という職人一家の子として、オルレアンに生れた。神童の誉れ高く、エコル・ノルマンに合格(1894)、ベルグソンの講義に接し、大きな影響を受けた。また社会主義理論にひかれ、ジョーレスの社会党に加入し、実践活動を行った。ドレフュス事件に対しては、正当な裁判を要求し、ドレフュスの無罪判決を実現しようとした。しかし政治の現実の醜悪さに嫌気がさし、ジョーレスと訣別(1900)、彼の本質に潜在していた神秘主義的信仰心が湧出し、やがてカトリックに回心する(1908)。政治活動を断念した年に創刊した「半月手帖」には、現代政治の問題を扱った評論も掲載したが、エコル・ノルマル時代に知りあったロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』や、ジュリアン・パンダ、アンドレ・シュアレスらの注目作も発表させ、同時に連載したペギーの情熱的な諸論文と共に、当時の若き知的選良たちに大きな影響を与えた。ペギーは反教権主義、反軍国主義を否認し、ドイツの侵略の脅威に直面している祖国フランスを防衛すべく愛国主義者に変貌していく。キリスト教徒として祖国を亡国の危機から救出したジャンヌ・ダルクを歌った作品(*Mystère de la charité de Jeanne d'Arc*, 1910)で、自分の故郷オルレアンで殉教した聖女を、キリスト教徒であり愛国者の理想として称揚している。かくして第1次世界大戦勃発と同時に志願し、マルヌの会戦で戦死する(1914.9.5.)。彼の全作品に漂う神秘主義的情熱とキリスト教的人類愛は、カトリック信仰の復興に大きく寄与している。

11) *Cahiers de la Quinzaine* : 1900年1月5日、シャルル・ペギーが創刊した月2回発行の雑誌で、1914年9月5日、ペギーの戦死により廃刊。不正なドレフュス事件に直面し、自由に真理を語り、より良き社会主義的未来を建設する事をモットーとした。全238冊。政治評論はもとより、文学、哲学、歴史、教育、時事問題などジャンルを問わず、注目すべき論文、評論、創作を発表した。執筆者は当時の碩学たちで、ベルグソン、アナトール・フランス、ジョゼフ・ベディエ、ロマン・ロラン、ジョーレス、ジュリアン・バ

ンダ、アンドレ・シュアレスらである。ペギー自身も、前記のジャンヌ・ダルク頌をはじめ『われらの祖国』『金銭』などの代表作を発表した。

12) Action Française : 1898年4月、アンリ・ボージョワとモーリス・ピュジョにより創立された政治団体。ドレフュス事件の時、再審と無罪を要求するドレフュス支持派の左派勢力に対抗するため、最初は数名のインテリの国家主義者が参加した。しかし、1899年1月に参加したシャルル・モーラスの影響により、彼の主張する「完全な国家主義」nationalisme intégralに共鳴したバンヴィル、レオン・ドーデらの努力により、急速に勢力を拡大する。モーラスの完全なる国家主義とは、反議会主義の中央集権的、独裁的伝統的世襲制の王朝を意味した。1899年1月から刊行していた小雑誌 *L'Action française* を、1908年3月21日から堂々たる日刊紙 *L'Action française* に衣更えしたのである。彼らは民主主義の現体制を武力で転覆させんとし、実動部隊「王の騎士」Camelots du roi を結成した(1918-1939)。彼らはドイツに対する復讐の準備とジョーレスら左派に対する攻撃を開始した。この騎士たちは「アクション・フランセーズ」の売子と同時に王党派としての自負を持っていた。モーラスらはローマ教会を秩序の保証人としたが、1926年にその過激な運動によりローマ教会から非難された。しかしその後の改悛によりピオ12世によりその非難は撤回される(1939)。彼らの活動分子の多くが、やがてファシズムに移行し、第2次大戦中はヴィシー政府を支持したため、戦後の解放時に、一時その活動を禁止され、モーラスは、1945年1月に終身禁固の判決を受けた。ドイツの敗北と共に、リヨンに避難していたアクション・フランセーズはド・ゴール派と対独協力派に分裂し、機関紙のアクション・フランセーズは、1944年8月に廃刊されてしまう。しかし戦後はピエール・ブータンを中心に再結成され、週刊紙「フランスの顔」*Aspects de la France* を発刊、更に1957年にブータンは週刊紙「フランス国」*La Nation Française* を創刊した。アルジェリア戦争の進展と共に、ド・ゴール派とO.A.S.の対立が鮮明になるにつれ、アクション・フランセーズの内部もまた再分裂の危機に陥った。現在ではル・ペンの率いる国民戦線が、伝統的右派勢力を代表している。

13) Charles Maurras (1868-1952) : 地中海に臨む南仏のブッシュ・ド・ローヌ県出身の詩人、評論家、政治家。純粹のプロヴァンス男で、父は収税吏だった。幼時から耳が悪く、そのため船員になる希望も捨てたが、この病苦がおそらく信仰心の喪失につながったと思われる。18歳でパリに上京、コントの実証哲学から影響を受け、アナトール・フランス、モーリス・バレスと交友、ローマ派の創設に参加、詩集『プシケのために』*Pour*

*Psyché* (1911), 『内なる音楽』 *La musique intérieure* (1925) など発表し、新古典主義の詩人としての名声を獲得した。またミュッセとサンドの恋愛を扱った『ヴェネチアの恋人たち』 *Amants de Venise* (1902) や、『知性の未来』 *Avenir de l'intelligence* (1905) を発表し、作家、評論家としても注目された。ドレフュス事件に際しては反ドレフュスの態度を明確にし、この事件を契機にして政治活動に没入、政治団体「アクション・フランセーズ」の結成に参加、同名の機関紙「アクション・フランセーズ」を発刊、王征復古を目的とする国家主義者に変身してしまう。反議会主義、反民主主義、反ユダヤ主義を主張、国粋主義鼓吹のチャンピオンになった。第2次世界大戦に際しては、ムッソリーニ、フランコ、ベタンの支持を表明したが、反ドイツ主義の立場からそれほどナチに協力はしなかった。しかしヴィシー政府の支持者と目され、「アクション・フランセーズ」紙がヴィシー政府の御用新聞の役を担った点を指摘され、対独協力者の罪で、終身禁錮の判決を受けた(1945)。またアカデミー・フランセーズから除名されたが、死の直前に恩赦を与えられ(1952)、クラリヴォー拘置所から釈放され、同年11月16日に歿した。

14) Jules Joseph Bonnot (1876–1912) : スイス国境に接する東部フランスのドーブ県出身の無政府主義者。「ボノ強盗団」 *bande à Bonnot* と称せられた強盗団の首領で、1911年から1912年にかけ、多くの銀行を襲撃し、そのうち数件は殺人をしている。史上初めて自動車を使用した点が犯罪史上注目される。最後の襲撃の後、隠れ家のガレージを警官隊に包囲され、数時間に及ぶ銃撃戦の末に、共犯のデュボワと共に射殺された(1912.4.29.)。共犯者たちは捕縛され、1913年4月、4人が死刑、11人が懲役刑の判決を下された。

15) Avenue Gabriel : 第8区にあり、コンコルド広場とボワシー・ダングラ1番地からマティニョン大通りを結ぶ、長さ700米、最狭幅15米の通り。その名前はコンコルド広場を建設した名建築家ジャック・アンジェ・ガブリエル(1698–1782)に因む。1670年に一部開通し、現在の姿になったのは1818年である。凱旋門に向い、シャン・ゼリゼ大通りの右側の通りで、リヴォリ街につながっており、1番地にアンヴァサドゥール(大使)劇場、2番地にアメリカ大使館、3番地にアンヴァサドゥール・レストランなどが立ち並ぶ繁華街である。

16) rue La Fontaine : 第16区にあり、ドクトゥール・アイム広場とドニゼッティ街を結ぶ、長さ962米、幅13.3米から20米の通りで、一部は旧オートゥイユ村の村道であった。1865年に寓話作家ジャン・ド・ラ・フォンテーヌの名をつけられたこの通りは、最

初、チュイルリ街とグロ街の2つに分かれていた。グロ街といっても、オートゥイユからパッシーに至る田舎道で、途中に泉があって周辺は沼澤地であった。1766年にオートゥイユの代官が、住民たちに干拓のため溝を掘るよう命じたが、費用は彼らの自弁だった。後にナポレオンⅠ世がこの2つの道を石で舗装させ土手道に改造したのは、オートゥイユからサン・クルーまで容易に行けるようにするためであった。命名は1865年の事だが、ラ・フォンテーヌがオートゥイユに住んでいたことと、泉（フォンテーヌ）にかけたものである。

17) Odette Swann：ブルーストの『失われた時を求めて』の主要人物の一人シャルル・スワンの妻。高筆娼婦だったオデットは、裕福な株式仲買人の息子で、ゲルマント家のサロンの人気者であり、パリのブルジョワ社交界のダンディの一人であるシャルルを、恋の手管を使って籠絡し、遂に結婚する。しかし彼女が妻の座を得た時には、それまでの烈しい恋と嫉妬の果にシャルルはオデットに対する愛を失っていたのである。

18) rue Hamelin：第16区にあり、ボシエール街とクレベール大通りを結ぶ、長さ315米、幅12米の通り。この通りは1864年に開通し、1867年に海軍提督アルホンス・アムラン（1796-1864）の名をとって命名された。44番地にある邸にブルーストは1919年から住み、1922年11月18日、51歳でこの邸で歿した。

19) Jeanne-Julia Regnault, 通称 Julia Bartet (1854-1941)：パリ生れの女優。コメディ-フランセーズの主演女優として（1879-1919）、彼女は多くの大役を、特にアンティゴース、アンドロマック、ベレニスを見事に演じたので、人々から「女神」la Divine と賞賛された。

20) Judas Colonna, 通称 Edouard Colonne (1838-1910)：ボルドー生れの音楽家。1871年にパリで「国民音楽会」le Concert national を組織して演奏活動を行った。この会はすぐ後に「コロンヌ音楽協会」l'Association des concerts Colonne となった。彼はほぼ40年にわたり演奏活動を続け、特にフランス人の作曲家たちを熱烈に擁護し、ベリオーズ、ビゼー、ドビュッシー、ラヴェルなどの曲を演奏した。

21) Charles Lamoureux (1834-1899)：コロンヌと同じボルドー出身のヴァイオリニスト、オーケストラの指揮者。ワグナー作品と同じく古典音楽の愛好者であった彼は、1881年に「新演奏会」les Nouveaux Concerts という協会を設立したが、間もなく自分の名を冠した「ラムルー協会」と変更、古典音楽とワグナー作品の演奏を行った。特にワグナーの全作品の演奏をしたフランス最初の指揮者である。

22) Jardin de Paris：パリ市第14区のゲテ街（長さ296米，幅18米）の27番地にあったダンス・ホール兼レストランで，1840年に設立された。やがて Prado d'Eté と改名される。人の背の高さほどの塀の向うは，モンパルナス墓地だった。ここに務めていた照明係の Bullier なる人物が，後日，第5区，第6区，第14区につらなるオプセルヴァトワール大通りの39番地に le bal Bullier を開場して有名になった。

23) Lapérouse：第6区のグラン・ゾーギュスタン河岸（長さ354米，幅16米）にあったレストランだが場所は残念ながら調べがつかなかった。55番地にあったグラン・ゾーギュタン修道院に建設された「ラ・ヴァレ市場」le marché de la Vallée（長さ62米，幅46米の建物）の中にでもあったのだろうか？

24) Hôtel Ritz：パリ第1区にあるヴァンドーム広場（長さ224米，幅213米の長方形の広場）の15番地にある。最初の所有者から遺贈されたこの邸の新所有者がアントワヌ・ド・グラモンだったので，Hôtel de Gramont と呼ばれていた（1710）。その後も遺贈や転売が繰り返され，1898年にセザール・リッツが買収して改造し，家具付きホテルとして開業し，現在に至っている。パリ随一の豪華ホテルとして有名で，そのレストランもまた食通の愛好する店である。

25) Jean Edouard Vuillard（1868－1940）：フランス中東部のソーヌ・エ・ロワール県キュイゾー出身。ボナールと共にナビ派の代表的画家。コンドルセ高校でルーセル（1867－1944）を知り，後に彼の妹と結婚する。二人は共にパリ美術学校つぎにジュリアン画塾に学び，ここでボナールら後のナビ派の同志と知り合う。彼は象徴派のグループとも交友し，舞台装飾にも関心を持って，自由劇場や製作座のために働いた。象徴派的テーマに対し，彼は一般市民の日常生活にみられる情景，静物，読書，食事，縫物などの室内や街頭の風景，肖像などを洗練された色彩で詩情豊かに描いた。彼は水彩画，パステル画，版画などにも秀作を残しており，また壁画も製作している。

26) Les Nabis：1890年頃，ジュリアン画塾に学んだ画家たち，ボナール，ヴュイヤール，ルーセル，ヴァロトン，モーリス・ドニらが結成した美術団体。象徴主義の色彩が濃厚で，特にゴーガンの影響をうけた。

27) Fauvisme：1905年，レオン・ヴォクセルが評論の中で使用した fauve が，以後広く使用されるようになった。この運動は，1900年にヴラマンクとドランの邂逅から生れた。彼らの画風は，形や風景を単純化し，鮮烈で純粋な色彩で対象を描く点に特色があった。その荒々しいといつてよい画面の躍動感を与えるタッチが，あたかも野獣 fauve

の様な印象を与えたため、この呼称が生れた。ヴァン・ゴッホとゴーガンの影響がみられる。マチス、マルケ、ルオー、デュフェイ、ブラック、ヴァン・ドンゲンらが主要メンバーだったが、1908年頃から既に彼らはそれぞれ独自の道を進み始めていた。この後に来るシュルレアリスムはこのフォーヴィズムとドイツの表現派の影響を受けている。

28) André Derain (1880-1954) : パリ近郊イヴリーヌ郡の郡庁所在地のシャトゥーに生れる。パリのジュリアン画塾、次にカリエール・アカデミーで学び、そこでマティスと会う。同郷の友ヴラマンクと故郷のシャトゥーの同じアトリエで制作する。ドニ・スーラや特にヴァン・ゴッホの影響を受け、色彩に力点を置き、大胆なタッチで描くようになる。この色彩の情感の力が、彼をしてフォーヴィスムの最も大胆なメンバーにしている。彼はスペイン国境に接し地中海に臨むピレネー・オリアンタル県の港町コルウルでマチスと共同で制作しているが(1905)、この港町にはこの他にもピカソも滞在している。彼はスペイン、イタリアの各地を歴訪し、ビザンチン様式のモザイク模様やロマネスク美術、またイタリアに散在している古典主義の大家の作品に関心を抱き、調和と節度ある技法を体得し、簡明で重厚な絵を描くようになった。作品には静物や風景画が多いが、豊麗なヌード画もある (*Modèle d'une blonde*, パリのオランジュリ美術館蔵)。

29) Maurice de Vlaminck (1876-1958) : 1896年から自転車乗り、ついでジブシーの楽団でヴァイオリンを弾いていた(ポーランド系の彼の両親も音楽家だった)。アマチュアとして画も描いていたが、1900年頃ドランと会い、セヌ川のシャトー島のアトリエを共同で使用し、制作に没頭した。アナキスト的思想の持主で文才もあり、新聞に評論を発表、小説も創作している (*Tout pour ça*, 1903)。彼は伝統的アカデミズムの画風を全く無視し、本能の力と主体性の自由に立脚した画風を樹立した。1907年にマティスを知り、またヴァン・ゴッホから深甚な影響を受け、強烈なコントラストを示す色彩を駆使し、風景や郊外の景色、街頭情景を荒々しいタッチで画面に叩きつけるように描き、典型的な野獣派の画家としてデビューした (*Les Arbres rouges*, 1906 : *Le péniche*, 1905)。1905年のサロン・ドートンヌで、野獣派の代表的画家としての名声が確立した。その後、彼の画風は急速に変化して行き、伝統的な形態の表現になる。風の吹きまくる荒天の下、の村落や田園が暗い青や灰色で描かれた作品は、愛好家の垂涎的となった。彼は画の他にも、多くの文芸作品の挿絵を描き、リトグラフや木版画も多数制作している。

30) Henri Matisse (1869-1954) : 画家、デザッサン画家、彫刻家。ベルギー国境に接する北仏ノール県の古都ル・カトーの出身。最初法律を学び、公証人の書記になったが、

病氣にかかり療養中に画を描いたのが機縁となり、画家を志した。ジュリアン画塾ついで美術学校に入学し、ギュスターヴ・モローに師事、モローからルーヴル美術館の巨匠の作品を模写するように勧められ、マティスはそこでイスラム美術にも関心を持つに至った。この間にルオーやマルケと知り合い、ついでデュフィやフリーズとも知り合った。この時期の彼は印象派、ゴーガン、セザンヌ、ロートレックらの影響を受けた。またサン・トロベ滞在後は点描派のシニャックからも影響を受けた。大胆なタッチで強烈な色彩を使用し、古典派の伝統的遠近法を放棄し、写実より表現を重視して平面的な人物像を描いて、新しい流派の出現を宣言した。ドラン、グラマンク、マルケらと共に、1905年のサロン・ドートンヌに出品したマティスは、野獣派と命名されたこの新流派のリーダーと目されたのである。プロポーションに重きを置かず、柔軟で流れるような線でダイナミックに表現の価値を強調してきた彼の作風は、ピカソの立体派を知ってから(1910)徐々に単純明快な線描と平面的画面構成に移転して行く。第1次大戦後はニースに定住、南仏の清朗な自然の中で、純粹鮮明な作品を描き続けた。彼は銅版画や彫刻にも卓抜な技倆を持ち、傑作を發表している。代表作は *La Danse* (1931), *le Nu rose* (1935) など。

31) Albert Marquet (1875-1947) : ボルドー生れの画家、デッサン画家。マティスと同じく美術学校でギュスターヴ・モローに学び、マネ、ロートレック、ボナール、セザンヌ、シニャックらの作品に関心を抱いた。1905年のサロン・ドートンヌに出品し、マティスらと共に野獣派の一人と見做されたが、彼はこの流派の中で最も穏健で、その画風は彼の人物そのものの温雅で流麗な作品を提供している。彼は特にパリの街の眺望を愛し、詩情溢れる平和な都会風景を描いた。またデッサン画家としても秀抜で、鋭敏な観察眼は物の動きと形態を精緻かつ適確に把握して描写したので、マティスをして「彼はわれらの北斎だ」といわしめている。旅を愛した彼は、訪れた土地、ルーヴル、ナポリ、ハンブルク、ボルドー、ダンケルク等各地の風景のシリーズを創作している。代表作は *Le Quai des Grands-Augustins* (1906), *Le Quai de Conti en hiver* (1947) などである。

32) Quai Saint-Michel : 第5地区にあり、プチ・ボン広場とサン・ミッシェル広場を結ぶ、長さ157米、最狭幅17米の河岸。この河岸の建設は、1767年に礎石が据えられたが、実際に工事が開始されたのは1812年で、1816年に完成、終点のサン・ミッシェル橋の名をとって命名した。この河岸の造成によって、昔からあった小路 *ruelle des Trois-Chandeliers* が消滅した。「3本の燭台」*Trois-Chandeliers* は、この小路にあった商店の看板に由来する由で、1366年には既に文書に記録されているそうである。29番



地の家の6階に、1831年、ジョルジュ・サンドが娘と住み、『アンディアナ』*Indiana*を執筆している。家賃は年300フランだった。乳母の日当は2フランだった。サンドは翌32年の年末に近くのマラケ河岸に移転した。

33) Magasins de la Samaritaine : 第1区にあるモネ街(長さ125米、幅13米)の1番地に、1839年、エミール・コニャックによって創業したデパート。コニャックは立志伝中の人物で、13歳の時に店員となってから勤勉努力し、一代でこのデパートの経営者に立身出世した。店名のサマリテヌはポン・ヌフに1609年から1813年まであった揚水ポンプの給水塔で、コニャックはお客さんに安くて良い商品を提供する事は、イエスに水をさしだした善きサマリヤ女を想像したためであろう。

34) Le Cubisme : 立体派。野獣派の名称を創案した美術評論家ルイ・ヴォクセルが案出した用語。セザンヌがこの派の先駆者と目されている。1908年、ブラックがサロン・ドートンヌに出品した家のある風景を、マティスが小箱の集積と語った事から由来する。1906年から07年にかけてピカソが描いた「アヴィニョンの娘たち」*les Demoiselles d'Avignon*は、セザンヌと黒人美術の影響を受け、形態は極端までに単純化されている。この新流派は、詩人のアポリネール、サロモン、ジャコブらによって熱烈に支持された。特にアポリネールは、立体派のJean Metzinger (1883-1956)らと共に立体派の主義や綱領を解説し宣伝して、情宣活動を行った。立体派の主要メンバーはこの他にフェルナン・レジェ (1881-1955)、ロベール・ドロローネー (1885-1941)、ホアン・グリ (1887-1927)などがいる。立体派は、1920年以降、あらゆる装飾及び工業美術や建築の進展に大きな影響を与えた。

35) Le Bateau Lavoir : 第18区のモンマルトル界隈のラヴィニャン街にあったオンボロ・アパートで、1970年に取り壊された。このアパートに多くの画家や作家が住んでいた。マックス・ジャコブ、マンデル・サルモン、ヴァン・ドンゲン、ピエール・ルヴェルディー、モジリアーニ、フォアン・グリ、ピカソ (1904-1909)らである。またアポリネール、マリ・ローランサン、ブラマンク、デュフィ、ガートルード・スタイン夫妻などもよく訪れた。このアパートが立体派誕生の温床となったといわれる。ピカソは代表作「アヴィニョンの娘たち」を描く (1907)。彼のアトリエは、1908年頃はこの新流派の本拠地となった。

36) rue Ravignan : 第18区にあり、アベス街とガブリエル街を結ぶ、長さ140米、幅10米から15米の通り。旧モンマルトル村の村道だった。パリからモンマルトルに通

じる道として 15 世紀には「サカリ街道」le Chemin Sacalie と呼ばれていた。荷馬車が通行できるように拡幅され、ワインと漆喰を運ぶ馬車のため、舗装工事が行われたが、馬車の通行に耐えかね、3 か月後に壊されてしまったという。1675 年に舗装工事が再び行われた。大革命時代には「古道」le Vieux-Chemin と呼ばれたが、1867 年にイエズス会の説教師 Lacroix de Ravignan (1795–1858) の名をとって命名された。7 番地の中庭の奥にある農機具置場を、1907 年頃マックス・ジャコブが借りている。彼はこの壁を黄道に宮図で装飾した。ここも洗濯船の一部かもしれない。

37) Le Cabaret de Lapin Agile : 第 18 区のモンマルトルの丘の上のソール街（柳町）（長さ 468 米、幅 10 米）の 1 番地にある。現在では有名なシャンソン酒場だが、歴史は古く、1860 年にモンマルトル村がパリ市に合併された頃まで遡る。当時はワインを安く提供する居酒屋 guinguette で、「泥棒たちの集合所」Au rendez-vous des voleurs という看板を出していたが、その後、有名な殺人犯ジャン・バティスト・トロップマン（1870 年 1 月 19 日、パリで処刑）の犯罪（医師一家 8 名、夫婦と子供 6 名を惨殺）に関した絵を飾って「暗殺者の酒場」Cabaret des assassins と改名した。1880 年に画家のアンドレ・ジルがワインの瓶をもってシチュー鍋から元気よく飛び出している兎 lapin を看板に描いた（そのコピーは現在も見ることが出来る）。1886 年に所有者の Sals なる人物が、カンカン踊りのダンサーをしていたアデルにこの酒場を譲渡した。彼女は「私の友達」Ma Campegne と名を変えたが、人々は普通に Lapin à Gill の名で呼び、それが訛って現在の Lapin Agile（機敏な兎）になった。この店は忽ち大人気となり、クールトリヌ、ヴェルレーヌ、ルノワールらの画家や作家が常連になった。アリスティド・ブリュアンが 1903 年にこの店を買取り、フレデリック・ジェラル、通称フレデに貸した。フレデはその前にもジャン・バティスト・クレマン広場で le Zut というキャバレーの支配人をしていて、この店はこれ以後も人気の的で、マックス・ジャコブ、アポリネール、フランシス・カルコなどモンマルトルのボヘミアンたちの集う店となった。

38) Maurice Utrillo (1883–1955) : パリ生れの画家、デッサン画家。シュザンヌ・ヴァラドン (1867–1938) というすぐれた女流画家の子として生れた彼は、母がモデル時代に生れた故か父親が不明のため、1891 年にスペインはカタロニャ出身の美術評論家ミゲル・ユトリロの養子になった。ロラン高校生時代からアルコール中毒となり、その療養中に母の勧めで画筆を握るようになった。何度も入退院を繰り返しながらも (1912, 1914, 1916, 1919, 1921), 悲惨な窮乏生活に耐えながら描き続けた彼は、モンマルトル

の画家として伝説的な存在になっていた。オクターヴ・ミルボー、フランシス・カルコなどの熱烈な後援を受け、パリ市民の愛情的となり、その画業を賞せられてレジオン・ドヌール勲章を授与された(1928)。最初の印象派の作風から白色を多用し、パリ郊外やモンマルトルの風景、カフェ、教会、広場、無人の街などを哀愁に満ちた詩的雰囲気の中で描いた(白の時代、1907-1916)。やがて絵葉書を利用した街頭風景や眺望を多くの色彩を用いて描くようになる。サロン・ドートンヌ、サロン・アンデパンダン展に連続して出品し、愛好者の数を増やした。1934年に画家のルシー・ヴァーローと結婚、ヴェジネに引退した後も画業は続行したが、斬新な作品はなかった。

39) Juan Gris, 本名 José Victoriano Gonzalez (1887-1927): マドリッド生れのスペイン人の画家、石版画家。マドリッドで学び、ユーモラスなデッサン画でデビューした。1906年パリに上京、洗濯船に住み、「シャリヴァリ」などに寄稿するかたわら、アポリネール、マックス・ジャコブ、そして特にピエール・ルヴェルディーと親交を結んだ。ブラックやピカソの影響を受けて立体派の画を描き、第2回立体派展覧会のサロン・デ・アンデパンダンに初出品(1912)、翌13年夏はピカソとピレネー・オリアンタル県のセレで過した。彼は最後まで立体派独得の技法を探究し、セザンヌは建築に向うが、私はそこから出て行く、と語り、「私は抽象(色彩)で構成し、色彩が対象になった時に配列する」と語っている。ブラックとピカソと共に、グリは立体派の忠実な主要メンバーであった。

40) Giorgio di Chirico (1888-1978): ギリシャのヴォロ生れのイタリア人の画家。父はシシリーの鉄道技師だった。アテネ、ミュンヘン、ミラノと移転し、パリに1911年に上京、ピカソやアポリネールを知る。1912年から19年にかけ、アーケードやマネキンと「形而上的内部」*intérieurs métaphysiques* と呼んだ連作を発表する。伝統的絵画のテーマと同じく当時の革新的な造形の探究が見られた。イタリア風の宮殿や無人のアーケードのある広場、工場の煙突や塔や汽関車の中に、彼は非現的な手法で非人間的な物体の断片、彫像、マネキン人形、手袋、ボール、チェスボード、バスケット、楽器などを集め、日常的現実のありふれた秩序に挑戦した。シュルレアリスムと呼ばれた新流派の一人として、不可思議な雰囲気を醸成している画面の内に、一種のエロティスムも包蔵させていた。

41) Gino Severini (1883-1966): コルトナ出身のイタリア人の画家、モザイク制作家。1906年にパリに上京、モジリアニを始めエコール・ド・パリの画家たちと知り合う。1909年、詩人マリネッティ(1878-1944)や画家ボッチョーニ(1882-1916)らと共に「未来派宣言」*manifesto futurista* を発表、因襲的伝統を排し、戦争、スピード、爆音

を礼讃し、行動主義を芸術にも文学にも持ち込むことを主張した。3年後、彼はウィーン近郊のシヴレーに滞在し、多くの風景画を描き、パリに帰京してから、ダンスをテーマに制作を続けた。立体派の濃密な空間処理の安定性にひかれ、これを未来派のダイナミズムに融合しようとした。1911年、印象主義の分描派の影響を受け、グリらと知り合い、翌12年には彼らと展覧会を開催している。円形を多用し、「縮れた」moutonnéマチエールを使った彼の画面からは現実の姿を消してしまう。第2次大戦の数年前、モザイク制作に専心、舞台装置も手掛けた（ストラヴィンスキーの*Pulcinella*）。

42) Amedeo Modigliani (1884–1920)：中部イタリアのトスカナ地方の港町リヴォルノ出身の画家。ユダヤ人の銀行員の家に生れ、幼少から画才を発揮、フィレンツェつぎにヴェネアで学び、1906年にモンマルトルに、1908年にモンパルナスに住んだ。ロートレックとセザンヌを愛好し、彼の初期の作品にはロートレックと共にピカソの影響がみられる。貧乏と肺病に悩み、酒にまぎらわせたためアルコール中毒となり、極貧のうちに僅か36歳で死んだ。彼は風景画をほとんど描かず、うらぶれた貧民や裸婦を描いたが、その細長い首と卵形の顔は、哀愁をにじませながら不思議な優雅さを発散している。彼の死後、愛好家の間で彼の作品は高価で取り引きされて、彼の死の悲惨さを際立させている。

43) Marc Chagall (1887–1985)：ロシアのヴィテスブルク生れの画家。ペテルブルクの美術学校でバクスト（1868–1924）に学び（1908）、パリに留学し（1910–14）、印象派の影響を受けたが、アポリネール、ブレーズ・サントラル、モジリアニ、スーティン、レジェらと交流した。第1次大戦のため帰国（1914）、ヴィテスブルクの美校の教授などを務めたが、パリに帰京（1923）、第2次大戦中はアメリカに移住し（1941–47）、戦後はフランスに帰り、ヴァンスに定住した（1949）。印象派などの現代フランス美術の影響を受けながら、ロシアの伝統的民族性やユダヤ人の神秘性を融合した幻想的画風を創造した。花、風景、小鳥、恋人たちが彼のテーマになっている。

44) Chaïm Soutine (1894–1943)：リトアニアのスミロヴィッチ出身のユダヤ系の画家。貧しい家庭の次男に生れ、ミンスクで写真店で働き、その間にデッサンを学ぶ。パリに上京（1913）、コルモンの画塾に入学するが、伝統的なアカデミックな画風に嫌気がさし、すぐに退学した。シャガール、ローランス、レジェと交際し、またモジリアニとも親交があり、彼の紹介で画商のズボロフスキーを知り、彼の援助でカーニュなどにスケッチ旅行ができた（1919、1922）。彼は200枚以上の主に風景画を描き、そのうちの100枚以上をバルヌ博士が取得し、これ以後の買上げを約束した。生活苦から解放された彼はレ

ンブラントやクールベの作品に感動し、風景画、肖像画、静物画の創作に邁進する。第2次大戦が勃発すると、トゥーレーヌ地方のシャンピニー・シュル・ヴァードに疎開、風景画の新シリーズの制作を開始したが、潰瘍の手術の手遅れのために死去した（1943.8.9.）。赤、青、緑などの原色を大胆なタッチで画面に叩きつけつつ、絶望的な人間の苦悩や殺害された鳥獣の死体を主要テーマとして描いた。

45) Jean Pougny, ロシア名 Ivan Albelt Puni (1892-1956)：フィンランドのコナカナ生れの画家。音楽家の家に生れた。サンクト・ペテルブルクの美術学校で学び、パリに2度留学（1910, 1913-14）、翌15年3月、注目を浴びた展覧会「電車」Tramwayを同志の画家マレヴィッチ（1878-1935）と開催し注目された。彼はあらゆる前衛運動に参加、立体派の影響もうけ、マチスを思わす作品を発表している。にじみ防止のサイズを塗った画用紙にガッシュを好んで使用した。ペトログラード（1918）、ヴィテブク（1919）、ベルリン（1921）と移転した後パリに定住（1924）、これ以後フランス式にPougnyとサインした。この頃から前衛派的傾向から脱し、印象派風の家庭の情景を愛情深く描いた。具象と抽象の間を自在に往復した彼の作品から、見る人は2人の画家の作品ではないか、と考えてしまう程だった。

46) Vasillii Kandinsky (1866-1944)：モスクワ生れの画家、版画家。後にドイツ（1928）、次にフランスに帰化した。音楽と絵画に関心を持ちつつ、最初は法律を勉強した。1889年にヴォログダに民族誌と法制調査の使節団に参加した時、ロシアの民族美術に接し、翌96年にモネの作品に感激し法律を捨て絵画制作の道に進む決心をした。初期は印象派の技法を学んだが、その外光描写に満足せず次第に明確な輪郭を持たない非対象的幾何学的形と色彩によって描いた抽象画に移行していく。絵画は画家の造形で、色と形は象徴的意味を有する事を強調した。第1次大戦でそれまで活動してきたワイマールを離れロシアに帰国（1914）、モスクワで教鞭を執ったが、弾圧を感じて再びワイマールに戻り、一時グロビウス（1883-1969）の主宰するバウハウスの教授に就任、抽象絵画理論や舞台芸術の講義を行った（1922-33）。創造者であり理論家でもあった彼は生涯を通じて抽象画を擁護し、美術の神秘的な基盤を確立しようとしていた。

47) Georges Rouanlt (1871-1958)：パリ郊外のベルヴィル生れの画家。現代の宗教画や野獣派の代表的画家。ガラス絵描きの弟子からモローに学び（1891）、宗教画を創作する途中で、マチス、マルケらと知り合った。モローの死後創設されたモロー美術館の館長も務めている。レオン・ブロワの感化でカトリックに改宗してから（1895年頃）、彼

は神の不在の世界の人間の悲惨を実感し、その苦悩を描くのに野獣派と呼ばれた自分の暗く烈しいスタイルの正当性を確信したのである。現世の罪を顕現している売春婦や辻芸人、道化師などを荒々しいタッチで描いた。サロン・ドートンヌの創立者の一人で(1902)、フランス美術の興隆に寄与している。彼はまたアサン聖堂のステンドグラスの制作にも参加している。

48) Georges Bracque (1882–1963)：パリ近郊ヴァル・ドワーズ郡のアルジャントール出身。少年時代をル・アーヴルで過ごす。同地の美術学校で学び、デュフィらを知る。1900年パリに上京し美術学校に入学する。アンデパンダン展に入選(1906)したのは、野獣派の強烈な色彩と大胆なタッチの作品だった。ピカソと会って相互に影響し合って立体派運動を推進、現代絵画に多大の貢献をした。1910年頃からもっぱら静物画を制作し、立体派のシャルダンと呼ばれた。またピカソと共にコラージュ papier collée を使って斬新な技法を開発した。第1次大戦中の1915年、アルトワの前線で重傷を負い、1917年まで画筆を執ることができなかった。1920年以後は立体派から離れ、静物の描写の線も柔和になり、花、ギター、果物の構図は魅力的ハーモニーがみられる。

49) Raoul Dufy (1877–1953)：ル・アーヴル出身、この地の美術学校でブラックを知る。パリの美術学校で宗教画や歴史画の名匠レオン・ボナ(1833–1922)に学ぶ。最初は印象派の影響を受けるが、1901年にヴァン・ゴッホ、1905年にマティスの作品に接し深い感動を覚える。後にマルケ、グラマンクらと野獣派を結成し(1905–08)、サロン・ドートンヌやアンデパンダン展に連続して出品、大胆な色彩と自由奔放ながらも優美な雰囲気醸成している彼の作品はこの新流派の代表と目された。デザイナーのポール・ボワレの示唆で絹製品の衣裳や壁掛け、更に舞台装置の製作にも手をひろげた。彼はドーヴィルなど海岸の風景を得意とした。

50) Fernand Leger (1881–1955)：ノルマンディー地方のオルヌ県アルジャンタンの出身。建築設計技師から画家に転向、パリの美術学校やジュリアン画塾で学ぶ。印象派、マティス、セザンヌらの影響を受けた後、立体派に参加(1910)、ピカソやブラックに次ぐ有望な画家と目された。彼は技法と靈感の両面で独創性を発揮、現代社会の機械文明を明確な構図で表現した。彼の画面では、人間ですら機械の一分子として表現された。第2次大戦中はアメリカに滞在し創作活動を続行した(1940–45)。帰国後はニース近郊のビオに定住した。彼はスウェーデン・バレエ団などの舞台装置も制作、またアサン聖堂のモザイク装飾も手掛け(1946)、また映画の製作にも参加している。

51) L'Ecole de Paris : 1925 年頃からパリで活動している外国人画家たちの集団に与えられた名称。主要メンバーはブルガリア生れのアメリカ人パスキン、リトアニア人スーティン、ロシア人シャガール、イタリア人モジリアーニ、日本人藤田嗣治、ハンガリー人ヴェルテス、スペイン人ピカソ、ルーマニア人ブランクーシらである。

52) Julio Gonzalez (1876–1942) : バルセロナ出身のスペインの彫刻家。金細工師の息子。兄と家業に励んだが、バルセロナの美術学校に入学、1900 年からパリに定住し、シャヴァンヌやドガ風の画を描き、やがてピカソや洗濯船の画家達と親交を結ぶ。1911 年頃から彫刻に転向、特に 1927 年以後は鉄材を素材とする立体派的彫刻を制作し、熔接技術などをピカソに教えている。鉄材を自在に使用し、幻想あふれる抽象的立体像を創出した。

53) Pablo Gargallo (1811–1934) : アラゴン地方のマエラ出身の彫刻家。バルセロナの美術学校でピカソを知る。1902 年から何度もパリを訪問し、洗濯船の画家たちと知り合い、1925 年からパリに定住する。初めは新古典派を想起させるものがあったが、1911 年以降は独得の表情をもつ仮面を創作、更に金属の素材を利用して人体を自由に構成、骨格を自在に曲げた金属棒で制作した。それらの作品は表現派の傾向を示し、様式化の意欲と細部に幻想を盛りこもうという趣向がみてとれる。

54) Anton Pevsner (1886–1962) : ヴォルガの支流オカ川沿いのオレル地方の中心都市オレルの出身で、ツルゲーネフの故郷でもある。キエフの美術学校で学び (1902–09)、サンクト・ペテルブルクからパリに上京 (1910–13)、前衛派に関心を寄せ、またエッフェル塔に感動した。弟の Naum Pevsner、通称 Gabo と協力し、絵画と彫刻の制作に没頭する。モスクワで教鞭を執り (1917–21)、次にベルリンに滞在 (1922)、そしてパリに定住した (1923)。幾何学的構成をもつ抽象画の他に、セルロイドや鉄片を使って立体派に基礎を置く構成主義彫刻を制作した。この新しい主義に関して彼は、モスクワで弟と共同で *Manifeste realiste* を発表している (1920 年公刊)。彼は次に銅、青銅、真鍮の棒や軸を使用して幾何学的形状のオブジェを制作、ダイナミックな特性を賦与した。

55) Ossip Zadkine (1890–1967) : スモレンスク生れのロシアの彫刻家。ロンドンの美術工芸学校、パリの美術学校で学び (1909)、特にロダンの作品に魅了されたが、同時にアフリカの原始的彫刻にも関心を持った。第 1 次大戦には志願兵として従軍し、毒ガスで重傷を負った。彼は作品に情動的負荷 *change emotive* (烈しい情動的反応を引き起す契機) を付与しつつ、抽象的特性の持つ形態の純粋な遊びを避ける造形を探求している。



立体派から出発した彼はかくして独自の表現主義的作風を確立したのである。彼はまた有名作家たちの栄光を賛える象徴的モニュメントも制作している（ランボー、ロートレアモン、アポリネール、ジャリ、バッハなど）。

56) Jacques Lipchitz (1891–1973)：リトアニア出身の彫刻家初の建築を学んだが、パリの美術学校とジュリアン画塾で学び（1909）、1年ほどロシアに帰国したが（1912–13）。この間に伝統的アカデミックな画風を放棄、パリに再び来訪し、モジリアニ、マックス・ジャコブ、ピカソらと交友し、立体派に参加する。1914年から人体彫刻の制作に没頭、立体派的構成をもつ作品を創作した。1925年以降は、人体を扱ってもより自由な手法で、聖書や神話の人物を柔軟にしてダイナミック、抒情性すら感じさせる作品を生み出した。アメリカやイタリアにも居住し、表現主義的モニュメントも制作している。

57) Charles Despiau (1874–1946)：南仏ランド県の県都モン・ド・マルサン出身の彫刻家。パリの美術学校で学び、ロダンの助手となった。彼の彫刻や浅浮彫は神話をテーマにしたものが多く、ヌードも制作したが、伝統に縛られることはなかった。自然主義の影響を受けていたが、簡潔性を意識し、静穏な表情、均整のとれた構成、柔軟にして調和のある形態の造成に努力した。彼はまた多くの秀抜な肖像、胸像を制作、モデルの実像を繊細に表現し、心理的内面も浮き上がらせている。

58) Jacques Villon, 本名 Gaston Deschamp (1875–1963)：北仏ウール県ダムヴィル出身の画家、版画家。父エミール、兄弟のレイモン、マルセル、シュザンヌはいずれも画家や版画家の芸術家一家だった。公証人役場に務めていたが、1894年パリに上京、コルモン画塾で勉強する。最初はスタンランやロートレックの作品に類似するパリ情景を版画やデッサンで制作していたが、やがて立体派に賛同し、1911年頃、彼のピュトーにあるアトリエは、立体派の人たちの集合場所になった。彼は幾何学的比率に従って構図を作成し、対象は線と色彩の面の抽象的遊びとなって形は消滅するようにして、光を支配的位置につけた。生活の資を得るため模写もしたが、その間も光線の問題の探究を怠ることはなかった。1935年頃からより伝統的な主題をえらび、再び肖像画や人物がいる情景や風景画を描くようになった。光の明るい調和を見せる彼の画はその幾何学的構成と共に独創的であった。

59) quartier Saint-Marcel：パリ第5区と第18区を走るサン・マルセル大通り（長さ750米、幅40米）を中心とする一帯を指したものか。同名の教会参事会の邸があったためにこの名がつけられた。この周辺は19世紀後半までは貧民街で、犯罪人の潜伏場所と



なっており、『レ・ミゼラブル』のジャン・ヴァルジャンもコゼットを連れて住みこみ、ジャベール刑事の追及を逃れている。

60) rue Vavin : 第 6 区にあり、アサ街とモンパルナス大通りを結ぶ。長さ 375 米、幅 10 米から 12 米の通り。この通りはパリ市助役で代議士だったヴァヴェンの発議で拡張工事が実施され、菩提樹の並木が植えられた (1831)。やがて延長工事がなされモンパルナス大通りに連結して現在の姿になった (1850)。当時は住家もまばらで、田園地帯の面影を保っていた。

61) Constantin Brancusi (1876–1957) : ルーマニアのベルトザニ出身の彫刻家。貧農の家の生れで、初めブカレストで指物師の弟子になったが、美術学校に入学 (1898)。ヨーロッパ各地を旅した後にパリに上京した (1910)。ロダンの影響を受け、彼から助手にならないかとの依頼を謝絶、より自主的な道を行く事を選択した。アポリネール、マックス・ジャコブ、ピカソ、レジェ、モジリアニらと交友、立体派と南アフリカやオセアニア土着民の芸術品の感化を受け、象徴的意味をこめた原初的形態の作品を制作した。大理石と青銅の素材を磨き上げて造形した彼の彫刻は、感動を喚起する力を内蔵し、純朴な表現に原始的魔力を両生させようとしている。1956 年にフランスに帰化した。

62) Café de la Rotonde : 第 6 区から第 15 区を貫通するモンパルナス大通り (長さ 1,632 米、幅 39 米) の 105 番地にあった。大戦前夜の 1914 年にリビオンが開店、アポリネール、ピカソ、ドラン、グラマンク、サロモン、マックス・ジャコブ、モジリアニらが常連だった。1923 年に拡張され、画廊やレストラン、ダンス・ホール、ナイト・クラブが併設されたが、1958 年に閉店し、映画館になった。

63) Café du Dôme : 同じ通りの 108 番地にある。1897 年 10 月に開店した当時は実にささやかなカフェだった。1914 年の第 1 次大戦前は、レーニン、クラシン、トロツキーらが常連だった。1923 年に改築された。

64) Paul Louis Charles Claudel (1868–1955) : 北仏エヌ県の小都市ヴィルヌーヴ・シュル・フェール・アン・タルドノワに生れる。カトリック信者の家に生れたが、彼は少年期に信仰を喪失していた。母と姉と共に上京、ルイ・ル・グラン校から政治科学校の法科に入学し法律を学んだが、同時に文学にも関心を持ち、特にランボーの作品に感動する。1886 年 12 月 25 日のクリスマスの夕べ、ノートル・ダム寺院で神秘的体験をして神の存在を実感、カトリックに回心した。この頃から多くの作品を発表するが、『都会』は 1890 年に初稿、1897 年に第 2 稿を完成し、1901 年に刊行されたが、難解な構成を持

つ。その後は外交官として各国に駐在、日本には大使として赴任した（1921-26）。退官（1935）後はグルノーブル近郊のブラング城に引退し、創作と信仰の生活に入った。彼は豊かな学識と世界中に滞在して得た広い見聞を基礎に、カトリックの信仰に裏打ちされた見事な傑作を数多く発表している。代表作は『マリアへのお告げ』*L'Annonce faite à Marie*（1910）、『繻子の靴』*Le soulier de satin*（1929）などがあげられよう。

65) Frédéric Sauser, 通称 Blaise Cendrars（1887-1961）：スイスのヌーシャテル郡のラ・ショー・ド・フォン生れ。幼くして母を失い父とヨーロッパ各地を放浪した。第1次大戦中は外人部隊の兵士として参戦し片腕を失った。彼は文学に立体派的手法を導入しようとし、この混沌とした無秩序の世界の良心たらんと願った。『ニュー・ヨークの復活祭』*Pâques à New York*（1912）にはシュルレアリスムの手法がみられる。第2次大戦中はロンドンに住み、戦時特派員として、『イギリス軍の中で』*Chez l'armée anglaise*（1940）を書いた。

66) Jean Cocteau（1889-1963）：パリ近郊イヴリーヌ郡の郡庁所在地メゾン・ラフィットの富裕なブルジョワの家に生れ、幼少時から神童の誉れ高く、ジアーギレフの願いに答えて、この演出家を驚倒させたという。祖父は熱心な美術蒐集家で、父は画家だった家系の故か、彼は画才にも恵まれ、後に多くの秀抜な絵画やデッサンを残している。正規の学校教育を嫌悪、コンドルセ高校は早期退学し、文学的社交界に出入し、サティやストラヴィンスキーらの音楽家、ピカソ、モジリアーニらの画家、ジアーギレフらの演劇関係者らを知り、六人組作曲家たちと前衛芸術運動を起した。青年期の衛学的な気取った詩人から、戦後の混乱を体験した彼は、その原因を単なる政治的社会的制度の破綻とせず、人間性の喪失という根源的要因にあると看破する。彼は精神的危機の救いとしてカトリック信仰に接したり、阿片を常用して現実逃避を試みた。しかし彼の本性である文学者としての創作意欲が、作品を創造する事により、コクトーを復活させたのである。詩、小説、劇曲、映画シナリオ、絵画、音楽などあらゆる分野にその天才を開花させていった。代表作は『恐るべき子供たち』*Les enfants terribles*（1929）、『悲恋』*L'éternel retour*（1943）、『オルフェ』*Orphée*（1590）など多い。

67) André Salmon（1881-1969）：パリ生れの作家、美術批評家。アポリネールやマックス・ジャコブと交友、ポール・フォールの雑誌「詩と散文」*Vers et Prose*に詩を発表した。やがてピカソ、ブラック、ドラン、グラマンクらと立体派運動に参加、日常的現実から触発される夢幻的雰囲気の漂う作品を発表した。またセザンヌやモジリアーニの評伝

を執筆し、二人の他にアンリ・ルソー、シャガール、ドランなど野獣派の画家たちを紹介し世に送った。彼は立体派運動に関する興味ある回想録『尽きぬ想い出』*Souvenirs sans fin* (1955-61)を残している。

68) Confédération general du travail, 略称 C.G.T. : 1895 年 9 月 28 日, リモージュに集合した各分野の労働組合が合同して統一組織を結成する事に決し, C.G.T. が誕生した。鉄道労組のラガリーズが書記長, 書籍組合のオーギュスト・クフェールが財務担当となった。結成の目的は, 給与生活者の精神的, 物質的, 経済的, 職業的利益を防衛するためであった。政党から独立を守ると誓ったアミアン協定 (1905) にも不拘, 第 1 次大戦までは分派活動がやまず, 革命派とアナルコサンディカリズム (国家の干渉や管理を排し, 労組の指導による社会の実現をめざす無政府主義的組合主義) が主流だった。1921 年に彼らは C.G.T. から分離し, 統一労働総同盟 Confédération générale du travail unitaire, 略称 C.G.T.U. を結成, 赤色国際労働者同盟 (Internationale syndicale rouge) に加盟した。1936 年 3 月, トゥールーズの会議で C.G.T.U. は C.G.T. と合同することになり消滅するが, 一部組合員は秘密裡に C.G.T.U. を存続させ, 彼らの主メンバーのアナルコサンディカリストは再び C.G.T. から脱会し, 労働全国同盟 Confédération national du travail 略称 C.N.T. を結成する (1964)。しかし現在でも C.G.T. が最大の労働組合である事には変りはない。

69) Louis Pierre Eugène Amélie Sédillot (1808-1875) : パリに生れ父エマニュエル (1777-1832) と同じ東洋学者。教授資格を得てから, パリのブルボン, アンリ 4 世, サン・ルイの各コレッジで歴史を教え, 1832 年にコレッジ・ド・フランスの書記に任命された。東洋語学校で長く教鞭をとり, その功でレジオン・ドヌールを授与された。東洋関係の多くの論文, 評論を発表しているが, アラビアの天文学にも詳しく, その方面の著書もある。主著は『アラブ民族史』*Histoire des Arabes* (1854)。

70) 1906 年 5 月 1 日 : 1 日 8 時間労働の権利の要求を掲げ, C.G.T. はパリ全市でゼネストを断行する決定をしていた。当日の騒乱に備え, 政府は前日に C.G.T. の書記長を逮捕し, さらに数百名に及ぶ不穏分子を拘束した。5 月 1 日, セーヌ県知事ルイ・レピーヌは軍隊の出動を要請, 歩兵部隊と龍騎兵部隊が市内の戦略的要所を占領し, 不測の事態に備えた。これらの予防措置のお蔭で, 5 月 1 日は不気味な平穏裡のうちに終わったのである。

C.G.T. がこれほど強硬な態度に出たのは, 去る 3 月 10 日, 北仏パ・ド・カレ県ラン郡のクリエール炭鉱でガス爆発があり, 1,200 名もの鉱夫が死亡した大惨事が引金になって

いた。ガス爆発の危険な前兆が頻発、C.G.T.の警告を無視して経営者側がなんらの改善策をとらず採炭を続行した結果、惹起された事故だった。これに怒った労働者のストライキが断行され、同様の危険を身近かに実感していた他の炭鉱労働者たちも同情のストライキに決起、これに刺激され、他産業の労働者もスト態勢に入るなど、経済と治安を揺るがす動乱の萌芽が生じた。このためクレマンソー内閣は断乎武力を行使しても、この危険な萌芽を刈り取る決意を固めたのである。

71) 1910 年 10 月 18 日のストライキ：北仏ノール県の鉄道従業員のストに続いて、フランス全国の鉄道従業員がストに入った。ブリアン内閣はストを失敗させるためにあらゆる手段を使う。買収による切り崩し、警察や軍隊を動員した示威の脅迫、組合指導者への個人攻撃。前首相クレマンソーがスパイを送って組合の団結を破壊させるのを見ていたブリアンも、前任者の狡猾残忍な手段を踏襲したであろう事は疑問の余地はなかった。ストの敗北は C.G.T.内部に革命的路線への懐疑を増殖させたが、これが分裂の契機になった。

72) rue Montmartre：第 2 区にあり、ランビュトー街とモンマルトル大通りを結ぶ、長さ 939 米、最狭幅 15 米の通り。この道はバリからモンマルトル修道院に通じる道だったため、1200 年には既にこの名がついていた。フィリップ・オーギュストの築いた城門モンマルトル門が建っていた。115 番地のブルトンヴィリエ侯爵邸が国王により買収され、駅馬車発着総本部になったため、この通りには多くの旅館が新築されるようになった。grand hôtel d'Angleterre (56 番地), hôtel de Rome (136 番地), hôtel du Tyrol (162 番地), hôtel des Voyageurs (112 番地) などである。146 番地にある「クロワッサンのジョッキで一杯」à la chope de Croissant という看板を掲げたビヤホールで、1914 年 7 月 31 日午後 9 時、ジャン・ジョーレスが暗殺された。享年 55 歳。暗殺犯ラウル・ヴィランはジョーレスの背後からピストルを発射して殺害した。逮捕された彼は、ジョーレスの反戦的言動、兵役 3 年制への反対、戦争阻止のためのゼネスト決行の呼び掛けなどを、祖国に対する裏切りと見做したのである。ジョーレス暗殺の報を知り、「ジョーレスが殺された、戦争になる！」という叫びが発せられた。これは正しく事態を予言したものとなる。何故なら、暗殺の翌日の 8 月 1 日、総動員令が発せられ、フランスは開戦に踏みきったからである。

73) rue du Croissant：第 2 区にあり、サンティエ街とモンマルトル街を結ぶ、長さ 177 米、幅 2.5 米から 10 米の通り。この街の名は、1612 年にあった商店の看板 croissant 三日月に由来する。当時の道幅は約 6 米で、1625 年から 1796 年までは、モリエールが埋

葬されていたサン・ジョセフ墓地の西側に沿っていた。1806年から1882年までは墓地の跡に出来たサン・ジョセフ市場に面していた。この通りは昔も今も新聞の印刷と発送の中心街である。

(続 く)

(追 記)

- (1) 参考図書などは〔I〕の巻末に掲載してありますので、そちらを御参照下さい。
- (2) 前稿〔XXX〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

p. 2. 上から12行目 クリューガー<sup>11)</sup>

p. 7. 上から12行目 3月31日立法

—— 2009. 6. 23. ——